

消せない放射能―土壌汚染の知られざる実態―

元NNNモスクワ支局長・元STV札幌テレビ放送解説委員

片野弘一

片野弘一と申します。私は一九七八年にSTV

札幌テレビ放送に入社し、報道を中心に取材活動を四〇年ほどやってまいりました。この記者生活の中で特に印象に残っているのは、一九八五年に持ち上がった幌延町の「高レベル放射性廃棄物・貯蔵工学センター」誘致問題です。町が閉塞する経済を活性化しようと誘致を表明したのですが、風評被害や核物質の漏洩を恐れる地元の家の方々などが反対しまして、機動隊も導入される大きな騒ぎになりました。

私はこの騒動をきっかけに、高レベル放射性廃棄物の取材に関わるようになりました。したがって、今日私が話をさせていただく内容も高レベル放射性廃棄物に関する問題が中心になります。放射能汚染土壌利活用防止条例制定研究会のテーマであり「土壌汚染」などとどれほど関わり合っている部分もありますが、必ずオーバーストップしている部分もあるはずで、よろしくお願いいたします。

1 ロシア・ウラルの核汚染

(1) 核兵器のために作られた秘密都市 マヤーク

最初にご紹介するのはロシアの放射能汚染です。私は二〇〇八年から五年間ほど、日本テレビ系列で構成するNNN(Nippon News Network)の特派員としてロシア・モスクワに駐在していました。その間、取材の中軸に据えたのはロシアにおける「核」の問題、とりわけ高レベル放射性廃棄物関連の問題でした。

ロシア以外にはあまり知られていないかもしれませんが、みなさんは「ウラルの核汚染」という言葉をご存知でしょうか。語源となったウラル山脈の麓にチェリヤビンスクという州があるので、かつてそこで大規模な核汚染が発生しました。その中心にあったのが、ソ連政府が第二次世界大戦後もない一九四五年一〇月に建設したマヤークという秘密都市だったので。

VTR① マヤークとは

「チェリヤビンスク州の南端、カザフスタンに近い森林地帯を行くと、突然「ここから先、外国人の立ち入りを禁止する」という大きな看板が目飛び込んできます。その看板の先およそ四百メートルに、核関連施設マヤークがあります。ソビエト連邦時代は、地図にも載っていない秘密都市。ここでは、核兵器用のプルトニウムが造られていたのです。そのプルトニウムは、一九四九年八月二十九日に現在のカザフスタンで行われたソ連最初の核実験に使われました。核実験の成功をきっかけに、ソ連はやがて超大国への道を歩み始めます。アメリカとソビエトの威信をかけた核開発競争。マヤークはプルトニウムの生産に追われました。」

Rでご覧いただきましたが、ここで改めてその詳

細を説明したいと思います。

第二次世界大戦が終了して四年ほど経った一九四九年二月、ソ連政府はマヤークで使用済み核燃料からプルトニウムを分離する施設を稼働させました。ソ連は一九四九年八月二九日に初めての核実験を行ったわけですが、この時使っていたプルトニウムもマヤークで生産したプルトニウムでした。マヤークではプルトニウムを取り出すのに非常に優れているとされる「黒鉛減速式」というタイプの原子炉を五基運用していました。

ですが、マヤークの場所は地図に掲載されていませんでした。核爆弾の原料となるプルトニウムを取り出す作業施設があるところですから、ソ連政府も重要機密としておきかかったのでしょう。そうした経緯もあり、マヤークは「秘密都市」とも呼ばれていました。

(2) 高レベル放射性廃棄物とは

皆さんもご存知かと思いますが、使用済みの核燃料からプルトニウムを取り出すときには同時に「高レベル放射性廃棄物」いわゆる「核のゴミ」が発生します。その高レベル放射性廃棄物は、核兵器を製造する時だけに生じるわけではありません。使用済みの核燃料からプルトニウムやまだ燃やせるウランを取り出して、もう一度核燃料として使おうというプラン、これを「プルサーマル計画」と呼んでいるのですが、その際にも、正確に言うと「再処理」という過程の中で、やはり高レ

ベル放射性廃棄物が産み落とされます。

日本では、資源の有効活用という名目でプルサーマル計画が推し進められていて、結果として排出される高レベル放射性廃棄物をいつどこで処分するのか。それが大きな課題となっています。

これは高レベル放射性廃棄物を閉じ込める「キャニスター」と呼ばれる容器のCGです(図)。容器自体はステンレス製で、高さは一〇〇センチから一三〇センチほど、直径は四十センチくらいの円筒形というのが標準的なサイズです。このキャニスターを製造したときの表面放射線量は、毎時一五〇〇シーベルトと言われています。これだけでは実感に乏しいかもしれませんが、人が近づくと二〇秒ほどで即死する放射線量と聞けば、もの凄いくさだとはわかるのではないのでしょうか。強い放射線によって人がどのようなかたちで亡くなってしまうのかは、良く分からないのですが、それだけ強い放射線量を帯びたものが高レベル放射性廃棄物ということです。

キャニスター製造時の表面温度は二〇〇度〜六四〇度と高温となるため、これを活用しようとする計画もあつたと聞いていますが、前述のとおりあまりにも危険なので、現在は地下三〇〇メートル以下という深い安定した地層に埋め、一〇万年間監視しようとしています。日本国内にはプルサーマル計画の下、放射性廃棄物はキャニスター換算で二万五千本、地下への処分計画が始まるとされる二〇三〇年過ぎには四万本になると言われています。それだけ強い放射能を持った物を地中に埋

めて一〇万年間監視する方針なのですが、具体的にいつどこで、どのように処分するかは全く決まっていません。

二〇一七年に経済産業省が高レベル放射性廃棄物の処分地選定を進めるために、候補となる条件を備えた地域を日本地図に落とし込んだ「科学的特性マップ」を公表しました。そのマップによると、日本の七割が適地とされているのですが、これを根拠として地層処分候補地に手を挙げる自治体は、現時点ではひとつもありません。

ちなみに、高レベル放射性廃棄物の地層処分する候補地について、政府は二〇〇〇年から自治体に募集をかけていて、二〇〇六年に高知県東洋町が調査に応じようとした一例が記録されてい

〈図〉



ます。しかしその後、当時の町長が補助金目当てで議会に諮らずに誘致していたことが分かり、町長が辞任して出直し選挙が行われるなどした結果、その試みは撤回されています。

つまり、高レベル放射性廃棄物の処分場選定は、自治体に対する募集が始まってから二〇年以上になりませんが、実績はゼロのままです。誘致に手を挙げ、文献調査を受け入れただけで一〇億円という補助金が出ますので、財政に苦しむ自治体にとって非常に魅力的に見えるかもしれない話ですが、さすがに地域の未来を閉ざしかねない核のごみには手を出さないとというのが日本の現状だと思います。

(3) 核汚染の実態①ーカラチャイ湖

ロシアの話に戻ります。先ほど紹介したマヤークでは、核のゴミ、高レベル放射性廃棄物を液体のまま、一九四八年から三年間、プルトニウム製造施設の敷地内にあるカラチャイ湖へ直接捨てていました。放射線は、間にある物質の重さに比例して透過量が減っていきますので、ある程度水の量があれば水面に出てくる放射線量は減少します。ですからカラチャイ湖の底に核のごみを沈めてしまえば大丈夫なのではないかといった判断があったように聞いています。

しかし実際には、放射性廃棄物が持つ熱でカラチャイ湖の水が干上がってしまったのです。よって放射性物質が直接風に晒され飛散するという大変な事態を招きました。これについては後ほど触

れたいと思います。そのカラチャイ湖に投棄された放射性物質量ですが、四五〇万テラベクレルと言われています。数字だけ聞くと、どれくらいもの量なのかなかなか掴みにくいかもしれません。ちなみに、チェルノブイリ原子力発電所爆発事故で空气中に放出された放射性物質量は五二〇万テラベクレルと言われています。ですから、チェルノブイリ事故に匹敵する量の放射性物質：つまり高レベル放射性廃棄物がカラチャイ湖に投棄されていたということなのです。

そもそも、カラチャイ湖は決して大きな湖ではありません。広さ〇・五平方キロ、深さは数一〇メートルといえます。沼のような大きさということだと思えます。当然、水量も限定的なため、一九六七年に干上がってしまった、ソ連政府は慌てて湖を埋めようと試みたのですが、その作業は非常に難航したといえます。チェルノブイリの原子力発電所事故の後には、その作業に使われた車体全体を鉛で覆ったトラック一五台をカラチャイ湖の封印作業に投入したそうです。ただ、周辺の放射線量は非常に高くて作業の支障となり、埋め立て作業は現在もまだ断続的に続いているそうです。

(4) 核汚染の実態②ーテチャ川

そして、マヤークの高レベル放射性廃棄物はカラチャイ湖だけではなく、施設の近くを流れるテチャ川にも投棄されました。その放射性物質量は一〇万テラベクレルと言われています。先ほどの

カラチャイ湖に投入した放射性物質量と比べればかなり少ないのですが、それでも一〇万テラベクレルはとんでもない量です。投棄を始めて三年後の一九五一年、ソ連原子力庁が流域を調査したところ、流域の三八町村で二万八一〇〇人が被害を受けていたと報告されています。

放射性廃棄物をテチャ川に投棄した当時、ソ連政府は危険性をどれだけ認知していたか分かりません。ただ、テチャ川流域の両岸に鉄条網の柵を設けて「近づかないように」とは警告したようです。しかし、流域の町や村では飲料水として、あるいは農業用水、家畜に与える水など生活のすべてをテチャ川に依存していました。ですから、流域の人たちは鉄条網の柵をくぐってテチャ川の水を利用し続けたと聞きました。

2 汚染された自治体ームスリュモワ村の取材から

テチャ川流域の一つに、ムスリュモワ村という小さな自治体があります(写真1)。マヤークの下流三〇キロのところであり、人口は三〇〇〇人ほど。住民の多くは酪農と畑作で生計を立てており、やはり飲料水や農業用水としてテチャ川の水を使っていました。先ほど話したとおり、一九四八年に高レベル放射性廃棄物の投棄が始まったのですが、その直後からムスリュモワ村では健康被害が相次いだと言われています。

私は二〇〇六年、ムスリュモワ村でどのような

被害があったのかを取材したのですが、住民の八割が何らかの被害を受けている状況でした。ただ、なかなか取材に応じていただけない環境もありまして、住民の方々の声を聞き取るにはかなりの困難を伴いました。会場の皆さんには、その時の証言などをVTRにまとめましたものをご覧いただきます。

VTR② 村民へのインタビュー

・酪農家のファミラ・ムサラフさん(六八)は、「どこもかしこも病気だらけ。骨は痛いし、腎臓も肝臓も調子が悪い。二回も手術をしたけど治らない」「放射能のことなど私には分からない」「政府は牛乳の検査はするけど、その結果を教えてはくれない。」

・農家のワキリ・ガタウリンさん(五三)は「首の周辺に原因不明コブができ、夜も眠れないことがある。手術で切除したけど、またすぐに再発した」「医者にはテチャ川に原因があると言ったが…」

・大学生のラムジス・ファイズーリンさん(二二)は「水頭症で疲れやすい。いつも頭痛に悩まされている。子どものころは歩くことが出来なかった」「医者には原因について何も語らなかつた」

・中学生のデニス・ラムさん(一四)は「右ひざから下がらない状態で生まれ、義足を手放せない。両手の指もなかつたが、手術でほんの少し回復できた」「(父親談)私も妻

も健康体。マヤーク以外の原因を私は見つけられない」

繰り返しになりますが、ムスリュモワ村の人口約三〇〇〇人のうち、八割が前記のような何らかの異変を持っています。村をざっと取材しただけでも、普通のところではとうてい考えられないような症状を持った人が大勢いるのです。さらに、村には頭が二つある牛や足の多いニワトリなどの家畜もいたのですが、撮影は禁止されました。それ以外にも、ホルマリン漬けになった異常出産の胎児なども保存されていたのですが、それらも取材許可がなされませんでした。

〈写真1〉



そのような中で、インタビューに答えてくれた村人たちから得たものは「放射線による被害は、非常に広範囲かつ強烈に広がっている」という確信でした。そこで問題となっているテチャ川の放射線がどれくらいの高さなのかを線量計で測ってみました。放射線にはいろいろあるのですが、線量計で測定可能なのはガンマ線です。透過率の低い α 線や β 線は含まれていませんが、ガンマ線の数値は毎時三五・三マイクロシーベルトという非常に高いものでした。

ちなみに、北海道新聞では朝刊に空間放射線量を掲載していますが、例えば、札幌市は平均で毎時〇・〇二マイクロシーベルト。福島市は平均で毎時〇・〇三マイクロシーベルトです。それらと比較すればテチャ川の放射線量毎時三五マイクロシーベルトは、通常値とされる放射線量の三〇〇倍、多く見積もると千数百倍の放射線量という桁違いの高い数値であることがよく分かります。

つまり、テチャ川の流域に一日いるだけで、一般人の年間許容被曝量とされる一ミリシーベルトを超えてしまうということです。福島第一原子力発電所事故の後、年間一〇ミリシーベルトまでは問題ないとの話もありましたが、私はその数値に疑問を持っていますので、従来の年間一ミリシーベルトが許容被曝量の基準になるのではないかと考えています。とは言え、一日テチャ川流域にいただけで一年間の許容被曝量を超えというのは、すごいことだと感じながら、そして少し恐ろしさも感じながら取材をしていました。

3 投棄以外にもあったウラルの悲劇

ウラル地方チェリャピンスク州の高レベル放射性廃棄物による汚染は、テチャ川の流域に広がった高レベル放射性廃棄物の投棄に起因するものだけではありません。一九五七年には高レベル放射性廃棄物を貯蔵していたマヤークの工場のタンクが爆発する事故がありました。当時、どのように保管していたのか詳細は明らかになっていないものの、高レベル放射性廃棄物を液体の状態で作成していた直径三〇メートル、高さ一〇〇メートル

くらいの円筒形のタンクが、放射性物質が発する高熱に耐えられなくなり爆発し、およそ五千メートルもの高さに黒煙が上がったと記録にあります。その時の被害は、風下のマヤーク北東側に広がったと推測されていて、放射性物質が降り注いだ地域では高い放射線を記録したということです。

先ほどから触れているカラチャイ湖への投棄も地域汚染の大きな要因です。湖が干上がったことよって一九六七年以降、放射線物質の飛散が始まりましたが、被害は今も完全には抑えられていないと聞いています。こうした事故や問題によってマヤーク周辺は非常に強い放射線物質で広範囲に汚染されました。

これらを総称して「ウラルの核惨事」あるいは「ウラルの悲劇」などと呼んでいます。ソ連時代にはその事実が一切明らかにされていませんでした。ロシアの一般の国民がそれを知るように

なったのは、ソ連が崩壊してからもかなりの年月が過ぎた二〇〇〇年以降のことです。

三度の事故や問題を起こしたマヤークですが、その工場では今でも古い原子力潜水艦や原子力砕氷船の原子炉解体作業が続いています。また使用済み核燃料の再処理も継続していて、日々新たなプルトニウムが、そして新たな高レベル放射性廃棄物が産み落とされているのです。

なぜなら、ロシア国内に核関連の施設は各所にあるそうですが、使用済み核燃料を再処理して、プルトニウムを取り出す本格的な施設はマヤーク以外に存在しません。結局、さまざま放射性汚染を引き起こしながらもマヤークは健在で、今もなおロシアの「核」を支える中心的な存在であり続けているのです。

4 ウラル放射線医学研究センターとの関係

マヤーク周辺の放射線被害を管轄しているのが「ウラル放射線医学研究センター」です。私も取材したことがあります。ここでは「マヤーク」に起因するとされる放射線被害を受けた患者およそ一〇万人について、治療や健康管理を一括して行っているとのことでした。ただし、センターの所長は「いろいろな被害が広がっているが、すべてマヤークとの関連は分からない。現在でもそれは証明されていません」と話していました。地元の人たちはマヤークを「悪魔の工場」呼んでいるのですが、

マヤーク周辺地域やテチャ川流域などに広がる健康被害との関連は、未だ謎のままという状況です。

放射能汚染によるガンなどの健康被害と原子力発電所事故の因果関係を認めないのは、福島第一原子力発電所事故も同じです。事故後、福島県は当時一八歳以下だった子ども全員を対象に甲状腺ガンの検査をしました。三十八万人が対象となったと聞いています。ガンと診断されたのは一六八人、ガンの疑いがあると診断されたのは四三人という結果が出ました。統計上、子どもの甲状腺ガンの発生率は百万人に一人とされておりましたが、残念ながら福島でも「事故と疾患の関連性」は否定されています。

放射能汚染による住民への健康被害については、チェルノブイリ原子力発電所爆発事故もよく取り上げられています。チェルノブイリ原子力発電所爆発事故が起きたときには、甲状腺ガンの手術を受けた子どもが六〇〇〇人にも及んだと言われています。そのうち一五人が死亡しているというデータもあるのですが、チェルノブイリ原子力発電所爆発事故においても甲状腺ガンと放射能汚染の因果関係は証明されていません。ソ連政府もロシア政府も、そして日本でもその因果関係を認めたくないというのが実態のようです。

5 取材からみたチェルノブイリ原子力発電所爆発事故

チェルノブイリ原子力発電所爆発事故について、

みなさんご存知のことが多いとは思いますが、せっかくの機会ですので、その概要に触れてみたいと思います。私はチェルノブイリ原子力発電所へ三度取材に行きました。一回目と三回目は日本テレビの仕事として現地に入りましたので、この研究会での写真使用の許可を日本テレビから取るうとしたのですが、申し訳ありません、時間的な制約から許可を貰えませんでした。二度目の取材は、私が所属していたSTVでの放送実績があったことから、著作権を持つSTVから写真の使用許可ができました。そこで今回は、二度目にチェルノブイリ原子力発電所を取材した時のことを話したいと思います。

(1) チェルノブイリ原子力発電所とは

私が二度目の取材でチェルノブイリ原子力発電所に行ったのは、二〇一一年三月下旬でした。二〇一一年三月と言いますと、東日本大震災が発生した月です。福島第一原子力発電所事故との関連取材ということで現地に行ったのですが、東日本大震災に気を取られながら…ということもあって、記憶がいささか乏しい部分もあります。その点はご容赦いただければと思います。

チェルノブイリ原子力発電所爆発事故を簡単に説明します。原子炉の型式は「黒鉛減速沸騰軽水圧力管型原子炉」と呼ばれるもので、黒鉛減速式原子炉と略されています。先ほどマヤークの説明でも申し上げましたが、この原子炉はブルトニウムを生産するのに優れているというのですが、私

は専門家ではありませんので、その構造的なことまでは触れることができません。事故を起こした四号炉の電気出力はおよそ一〇〇万キロワットですから、泊原子力発電所三号機とほぼ同じレベルということになります。

この原子炉の一番の特徴は原子炉格納容器を持つていない、ということです。例えば泊原子力発電所は「加圧水型」と呼ばれる原子炉なので、この型式であれば原子炉格納容器の中に原子炉をはじめとする重要機器が納められているのですが、黒鉛減速式には原子炉格納容器がないため、事故を起こすとチェルノブイリ原子力発電所のような悲惨な事故に結びつく危険性を持っています。そうした理由から近年、黒鉛減速式原子力発電所は急速に数を減らしています。現在アルメニアに老朽化した黒鉛減速式原子力発電所が一基あり、経済的な理由などで運転は続けているようですが、できるだけ早い段階で軽水炉型原子炉に切り替える話があるそうです。したがって、黒鉛減速式原子炉はそう遠くない将来、姿を消すことになるのではないのでしょうか。

(2) 事故の概要

事故は一九八六年四月二六日午前一時二三分に発生しました。これはモスクワ時間です。現在、チェルノブイリ原子力発電所はウクライナの領内なのですが、昔はソ連の一部でした。ちなみにチェルノブイリ発電所から一〇キロほど北に行くくと、

ベラルーシとの国境に出ます。当時のソ連にとつては辺境と言える地域で、そうした場所に作られたのがチェルノブイリ原子力発電所だったので。この事故の際、放出したとされる放射性物質の量は五二〇万テラベクレル、福島第一原子力発電所事故で出た放射性物質が三七万、六三万テラベクレルと言われていますので、これを遙かにしのぐ大事故だったと言えるでしょう。

死者数については、正式なことが分かっていません。ソ連政府が当時発表したのは四人で、主に消火活動に当たった消防士が被害者と聞いています。しかし、この規模の事故で四人というのはあまりに少なく、疑わしいと言わざるを得ません。一方、IAEA（国際原子力機関）の公式見解では、四〇〇人以上が犠牲になったのではないかと指摘しています。同じIAEAの、こちらは長期見解という資料によると、数百人から数十万人が前述した四〇〇〇〇人に加えて事故の影響で死亡している、あるいは死亡しているのではないかと推察しています。しかしながら、これもはっきりしたことは分かっていないということのようです。

事故後のチェルノブイリ原子力発電所の四号炉には「像の足」と呼ばれる溶けた核燃料、いわゆる燃料デブリが残されているため、事故後、この四号炉全体を覆うように「石棺」と呼ばれるコンクリート製の建物が作られました。私が行ったときには「石棺」は完成後二五年ほど経った時期で、あちらこちらに亀裂が入り、金属部分には錆が目

立っていました。

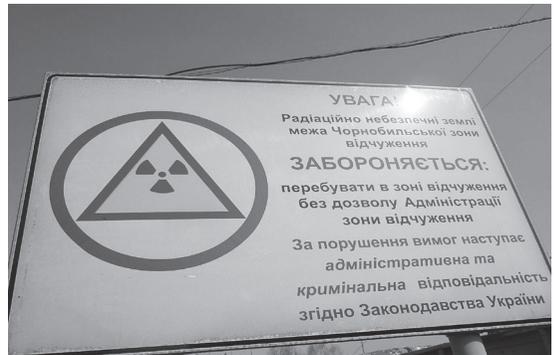
(3) 事故後、二五年を経たチェルノブイリの現状

チェルノブイリ原子力発電所は、ウクライナの首都キエフからおよそ一〇〇キロ、バスで二時間くらいのところにあります。現在、民間事業者がキエフから一人一〇〇ドル程度で四号炉のそばまで行く日帰りツアーをやっている、意外に繁盛していると聞きました。ただ、ガイドによる解説はウクライナ語、ロシア語、英語の三言語です。残念ながら日本語では実施されていないので、利用するには少しハードルが高いかもしれません。

チェルノブイリ原子力発電所から三〇キロ手前にチェックポイントがあり、ここで許可証を持っているかどうかというチェックを受けます。この場所には「チェルノブイリ原子力発電所までここから三〇キロ、これ以上の接近は非常に危険なので、注意するように」と書いた看板がありました(写真2)。

二〇〇〇年に稼働を停止したチェルノブイリ原子力発電所三号炉が見える辺りにさしかかると、手元の線量計は一時間あたり九マイクログラムを越える放射線量を測定しアラームが鳴り始めました。先ほど、札幌市の空間放射線量が毎時〇・〇二マイクログラムとお伝えしましたが、それと比較すればかなり高い数値であることが分かると思います。

〈写真2〉



これが「石棺」というコンクリート製の建物です(写真3)。ただ、当時すでに建築から二五年が経過してしまいましたので、ずいぶん劣化している印象を持ちました。私は石棺の前でリポートしたので、その時の放射線量は毎時一七マイクログラムでした。日によって違うのかもしれませんが、私が取材した時は「バスの外に出ても取材は二〇分以内」とガイドからきつく指示がありました。二〇分という時間制限の根拠はどこにあるかよく分かりませんが、ガイド曰く「訪問者全員にそうさせている」とのことでした。こちらの写真はブリピャチという街です(写真4)。チェルノブイリ原子力発電所から五キロほど離れたところにあり、原子力発電所で働く人が

〈写真3〉



住んでいた場所です。当時の人口は五万人ほどで、住民の平均年齢は二六歳という若々しい自治体だったそうです。事故後はもちろん居住禁止となり、ご覧のような廃墟と化していました。街にはいたるところに公園や遊園地があつて、当時のソ連としては非常に近代的な街だったそうです。

(4) チェルノブイリ周辺の森林地帯では何が起きているのか

チェルノブイリ原子力発電所取材の中で非常に気にかかったのは、半径三〇キロ圏内の森林地帯です。かつては、林業や農業を営む人たちの小さな自治体が点在していましたが、現在、チェルノブ

〈写真5〉



私が取材した時は松林から広葉樹の森に変わっていました。ただ、訪ねたのが三月でしたので、緑が乏しく寂しい感じではありましたが、見た目は普通の森林地帯になっていました(写真5)。しかし、放射線量はどこどころで毎時二〇マイクロシーベルトを超えていました。当時のソ連は、放射性物質を埋め込むことで除染を終えたと思っていた、あるいは除染が成功したと住民に思い込ませようとしていたのかもしれませんが。しかしチェルノブイリ原子力発電所の現実、放射能

の除去が一筋縄ではいかないということを雄弁に物語っているように思えます。

(5) チェルノブイリの今

二〇一一年当時、チェルノブイリ原子力発電所から三〇キロ圏の居住禁止区域内には、政府の方針に抗って数百人が住んでいると聞いていました。その中で私が取材したロデイチ村には一二人の方が住んでいました。ただし、皆さんが七〇歳以上の高齢者でした。他の三〇キロ圏内に住んでいる方のほとんども六〇代、七〇代の年金生活者です。若い人たちは戻ってくる気もないし、仕事上あるいは健康上戻りたくても戻れないという事情があるのだと思います。

現在のチェルノブイリ原子力発電所四号炉は、二〇一七年に完成したドーム型の新しいシエルター「石棺」をまるごと覆っています。シエルターの大きさは高さ一一〇メートル、幅二六〇メートル、長さ一六〇メートル、一〇〇年くらいは放射性物質を封印できるよう設計されています。実際、私の後任が取材に行き周辺の放射線量を測ったところ、毎時〇・〇五マイクロシーベルトだったと聞きました。以前の石棺から漏れていた放射性物質のほとんどは新しいシエルターに封印され、通常時と変わらない状態になったということです。ただし、チェルノブイリ原子力発電所に隣接する森では、まだ毎時一〇マイクロシーベルトを超える高い放射線量が記録されていると聞いています。

〈写真4〉



イリ原子力発電所から三〇キロ圏内は立ち入り禁止ですので、公式的には住む人はいないとされています。会場の皆さんには事故直後の森林地帯の写真を見て頂きましたが、チェルノブイリ原子力発電所からおよそ一〇キロまでの地域が非常に強い放射線に晒され、密集していた松が赤茶色に変色し、完全に枯れてしまいました。

当時、このあたりは「赤い森」と呼ばれていたそうです。この赤い森ですが、事故後三年ほど経ったときにソ連政府が枯れた松をすべて伐採し、放射性物質が付着したと思われる表土と共に、深さ五メートルほどの穴に埋め込む「汚染除去作業」を実施しました。地元の人たちはその後、埋め立て現場の周辺で一メートル四方もある巨大なきのこを何度も見たと話してくれました。それ以外にも奇形の動植物も多数発見されているとのことですが、こうした事実は殆ど公表されていないという事です。

の除去が一筋縄ではいかないということを雄弁に物語っているように思えます。

(5) チェルノブイリの今

二〇一一年当時、チェルノブイリ原子力発電所から三〇キロ圏の居住禁止区域内には、政府の方針に抗って数百人が住んでいると聞いていました。その中で私が取材したロデイチ村には一二人の方が住んでいました。ただし、皆さんが七〇歳以上の高齢者でした。他の三〇キロ圏内に住んでいる方のほとんども六〇代、七〇代の年金生活者です。若い人たちは戻ってくる気もないし、仕事上あるいは健康上戻りたくても戻れないという事情があるのだと思います。

現在のチェルノブイリ原子力発電所四号炉は、二〇一七年に完成したドーム型の新しいシエルター「石棺」をまるごと覆っています。シエルターの大きさは高さ一一〇メートル、幅二六〇メートル、長さ一六〇メートル、一〇〇年くらいは放射性物質を封印できるよう設計されています。実際、私の後任が取材に行き周辺の放射線量を測ったところ、毎時〇・〇五マイクロシーベルトだったと聞きました。以前の石棺から漏れていた放射性物質のほとんどは新しいシエルターに封印され、通常時と変わらない状態になったということです。ただし、チェルノブイリ原子力発電所に隣接する森では、まだ毎時一〇マイクロシーベルトを超える高い放射線量が記録されていると聞いています。

6 ロシアから見た東日本大震災と福島第一原子力発電所事故

そのチェルノブイリの事故から二五年後の二〇一一年三月一日。あの東日本大震災が起きました。一瞬にして一万五千人以上の命を飲み込んだ大災害が発生した時、私はNNNのモスクワ支局で、朝のニュースチェックをしていたように記憶しています。現在、モスクワと東京の時差は六時間ですが、当時はサマータイムが導入されていて、時差は五時間でした。地震は日本時間の午後二時四六分の発生でしたが、モスクワでは午前九時四六分になります。その発生時刻から一〇分後くらいに国営メディア・タス通信のアラームが鳴り、コンピューター画面の真っ赤な文字が「日本で壊滅的大地震が起きた」と伝えました。したがって、第一報は意外に早かったなどの印象を持っています。

すぐ、東京の日本テレビへ電話を入れたのですが、全く通じませんでした。逆にロシア外務省や地元マスコミなどがオフィスに取材攻勢を掛けてきましたがお答えできるものは何もないという状況でした。結局、東京と連絡がとれたのは地震発生後一日半くらい経ってからのことでした。日本テレビからの電話で「福島第一原子力発電所が津波被害を受け、福島中央テレビのモニターカメラが爆発の瞬間を撮影した。たぶん、水蒸気爆発と思われるが、いずれにしろ異常事態なのでIA

EA本部へ行き、取材をしてコメントを取ってくれ」と言われ、すぐに本部があるオーストリアのウィーンに向かいました。

滞在は一週間以上に及び、私はその間に取材したインタビュウ等かなりの本数、日本テレビに送ったのですが、残念ながら一回も使われることはありませんでした。後から聞いた話ですが、当時は刻々と入ってくる被害情報の整理だけで手いっぱいというほど報道現場は混乱していたようです。それだけ、日本国内が大変な状況だったということですね。

大震災の発生後しばらくして、ロシア政府が忌み嫌っている反政府系の新聞のコラムに「福島を失った日本に北方領土を返してあげよう」という話が載りました。これが読者の反響を呼び、私も取材を受けました。残念ながら「冗談ではない」と一蹴したようで、北方領土が返ってくることはありませんでした。ただ、モスクワ市内にはロシア語で「日本を救おう」と書かれた高さ三メートル、幅二メートルほどの大きな看板が赤の広場など七カ所くらい掲げられ、ロシア国民も日本に、あるいは原発事故というものに対して大きな感心を持っているのだな、という印象を持った記憶があります。

ロシア世論はとりわけ、福島第一原子力発電所事故の情報に敏感で、日々明らかになる原子力発電所の惨状はテレビニュースで必ず取り上げられていました。放射能汚染に対する恐怖や憎悪が少

しずつ広がっていく中で、私は二〇〇六年に取材したムスリユモワ村のことを思い出していました。

7 再びムスリユモワ村へ

(1) 大きく変わっていた村の姿

私は、前回取材から七年経った二〇一三年、再びムスリユモワ村を訪ねたのですが、村の様子は大きく変わっていました。先ほど、二〇〇六年に取材した時の写真を見ていただきましたが、家屋が点在していて人々が暮らしを営んでいる様子が分かると思います。前回とはほぼ同じところから撮ったのがこちらの写真なのですが、電柱がところどころに残されているなど、かつてここに村があったという痕跡はいくつか探し出せましたが、家屋はほとんどありません(写真6・7)。

実は、私がムスリユモワ村を取材した二〇〇六年夏のすぐ後、チェリヤピンスク州政府が村の閉鎖と住民の強制移住を決定しました。その理由は「放射能被害が深刻さを増しているから」ということです。とはいっても、私が取材した時点で事態はとくに深刻さを通り越していません、そもそも、原因となったテチャ川への放射性廃棄物投棄が始まったのは一九四八年です。確かに、ソ連が崩壊してロシアに国家形態が変わったことも大きく影響しているのですが、半世紀を経たの対応はあまりに遅すぎると言わざるを得ません。

〈写真7〉



〈写真6〉



さて、ムスリユモワ村の閉鎖とは、いったいどのような処置だったのでしょうか。取材したところ、二〇〇六年秋にまず住民を立ち退かせた上で、建物などの構造物をすべて重機によって壊し、解体によって生じた廃材などは、放射能によって汚染された表土と共に深さ五メートルの穴を掘って全部埋め込んだということでした。この放射能除去作業は、チェルノブイリ原子力発電所爆発事故で汚染された森林地帯に対して行われた処置と驚くほどよく似ています。

こうした対応策で放射線を封じ込めることが本来にできたのでしょうか。改めて現地で放射線量を測定しますと、線量計は毎時二三〜二五マイクロシーベルトという数値を表示しました。七年前と比べると、毎時一〇マイクロシーベルトほど下がっていますが、それでもムスリユモワ村に二日間滞在すると、年間の被爆許容量である一ミリシーベルトを超えてしまいます。しかも、ムスリユモワ村があった場所すべてで同じような数値を測定しています。放射性物質の除去はそんな簡単ではない。それが私の抱いた印象でした。

(2) 環境難民となった村人たち

チェリヤピンスク州政府は、元々村があった場所から約二〇キロ離れたところに「新ムスリユモワ村」を作りました。ムスリユモワ村に住んでいた三〇〇〇人に対しては、新ムスリユモワ村へ転・移住するのか、あるいは一〇〇万ルーブル(当

時のレートで、日本円に換算すると三〇〇万円ほど)をもらって他の自治体に移住するのかの二者択一を迫りました。結果として、八〇〇人ほどが新ムスリユモワ村へ移住し、残り二二〇〇人ほどが他の自治体に移住を決断しました。

しかし、村に残った八〇〇人の内訳を聞くと、ほとんどが六〇歳以上の高齢者で年金生活者でした。州政府が造った新しいムスリユモワ村には住居が整然と立ち並んでいるだけで、農地もなければ家畜を育てる牧場もありません。もちろんその他の産業などあるはずもなく、仕事によって糧を得る人たちは、そもそも村に残るという選択肢はありませんでした。要するに、ふるさとに残るというのは不可能なことだったので。放射能汚染によって、人々の生活が根本から破壊されてしまった。それがムスリユモワ村の悲しい現実です。

一方で、ムスリユモワ村を出て、新天地を求めた人たちにも重い現実がのしかかっていました。二〇〇六年の取材でお世話になったサミグリナさん(七三)という方がいたのですが、彼女は子供たちの住む州都チェリヤピンスク市に移住しました。ところが移住後まもなく、夫が健康を害して病床に臥せ、三ヶ月後に亡くなってしまったといえます。死因はガン。その原因がテチャ川かは分かりませんが、結局一人暮らしになってしまいました。血圧が二〇〇を超えていて、体調不良に苦しみながら「毎日ムスリユモワ村で暮らした日々を思い起こしています。ふるさとに帰りたい。今はそれだけが願いです。」と話してくれました。

ただ、彼女の思い出の中にあるムスリユモワ村は、もう存在しません。国家の威信をかけた核開発の栄光の陰で、ムスリユモワ村に住む人たちのように踏みじられた人生がどれほどあったのでしょうか。他国のことなのですが、やり場のない憤りと切ない思いがこみ上げてきたことを覚えていきます。

おわりに

(1) 放射性廃棄物を取材し続けて分かったこと

一連のロシア取材を通じて私が感じたことなのですが、一点目は放射能汚染に対する考え方が、その危険性とあまりにも乖離している、ということです。昔も、そして今もです。ウラルの悲劇は、当時、ソ連という閉鎖的な社会だったという状況的な原因もあるのでしょうか、ソ連に限らず、一九七九年にアメリカで起こったスリーマイル島原子力発電所事故でも、日本の福島第一原子力発電所事故の時にも、対応策は場当たりの著しく合理性を欠いています。

先日、福島県飯館村を取材しました。村役場は再開していましたが、職員はもろろん、村長でさえ福島市から通勤していると聞きました。国の除染作業によって飯館村は居住許可が出るほどに浄化されているはずなのですが、職員でさえ住まないと帰還する住民はいないでしょう。にも

かわらず、国は画一的な帰還政策を進めています。放射能汚染に対する住民たちの思いをいったいどのように認識しているのでしょうか。放射能汚染について、ほんの少しでも不安があれば、住民がそれを受け入れることなどあり得ません。一方的な論理が先行する状況は、問題の解決に何ら寄与しない、ということですが。

二点目は事故対策があまりにも場当たりのだ、ということですが。ムスリユモワ村もチェルノブイリ原子力発電所爆発事故も穴を掘って汚染された物を埋めました。これは言うまでもなく非常に安直な「対症療法」です。ただ、これはロシアに限ったことではありません。福島第一原子力発電所事故の場合も表面の土を剥ぎ取って、これを一定期間保存して、どこか安全なところにばら撒く施策を想定していると聞いています。前述した飯館村には、放射能に汚染された表土が黒いビニール袋に入って、大量に並んでいました。これをどう処理するのか。国は安全なところに持って行って埋め立てに利用したりするとのことですが、その安全性はどのように担保されているのでしょうか。具体的な受け入れ先はあるのでしょうか。その場しのぎの、時間稼ぎと思われるのが、私はフクシマの現実だと思っています。

三点目としては、核あるいは原子力と言いつてもいいのですが、その必要性を声高に叫ぶ一方で、その負の部分を負う人々に対する配慮を著しく欠いている気がしてならないという点で

す。ソ連はアメリカに対抗する核兵器の開発を国家の目標として掲げ、放射能災害への対応を明らかに怠りました。福島第一原子力発電所の事故も、原子力発電を国の基幹に据える国が、安全性を置き去りにしてきたために至った必然の結果です。そうした責任論を真摯に国が受け止めるのなら、これは受け止めなくてはならないのですが、まず第一には被害を受けた方々へのフォローに全力で当たらなければなりません。しかし、残念ながらそこを看過する風潮が支配的であって、これは実に残念な現実だという風に受け止めています。

(2) ジャーナリストとして泊原発の再稼働を考える

こうした総括を踏まえた上で、私は今、核開発に対してはもろろんのこと、核の平和利用とされる原子力発電に対しても非常に懐疑的な思いを抱いています。

およそ四〇年にわたって取材してきた高レベル放射性廃棄物を巡る問題から考えても、また相次ぐ悲惨な原発事故の観点からも、原子力に未来を見出すことができないのです。原発回帰や泊原子力発電所の再稼働がいま着実に進められています。果たしてそれは、私たちが歩むべき道なのでしょうか。身近な問題として私は、再稼働を目指している北海道電力・泊原子力発電所について少し考えてみました。

泊原子力発電所は二〇一三年七月に再稼働申請

をしています。当時は九州電力川内原子力発電所、四国電力伊方原子力発電所など五原発一〇基が同時に再稼働申請をしたのですが、すでに六年半が経過し、原子力規制委員会の審査が終了していないのは泊原子力発電所だけです。

そもそも、原子力規制委員会の審査自体が本当に安全を第一に考えているのかも疑わしいのですが、国が定めた審査でさえ通らない泊原子力発電所に私たちの命を預けていいのだろうかという疑問も出てきます。ちなみに、原子力規制委員会の更田豊志委員長は泊原子力発電所に対し、三つの課題を突きつけています。

一つ目は敷地内破砕帯、敷地内断層の問題です。泊原子力発電所の敷地内にはF1断層からF12断層までありますが、それがどのくらい原子力発電所の安全性に影響を及ぼすものかどうか。科学的な見解は諸説あつて、安全性を担保できていません。

二つ目は海底活断層や過去に起こった津波の解析が出来ていないため、地震、津波に対するハザード特定が出来ていません。

三つ目は火山による影響の精査が出来ていないという問題です。伊方原子力発電所では阿蘇にある火山の影響が指摘されています。泊原子力発電所においても、洞爺湖周辺にある火山の火砕流が影響を与える専門家の指摘もあります。これについて、具体的な検証ははっきりとしたかたちでは為されていません。

私は原子力規制委員会⇨政府の御用機関だと

思っていますが、そうした立場の人たちでさえ泊原子力発電所には様々な疑問を持っているため、再稼働を許可する状況になっていないのです。さらに泊原子力発電所に関して言えば、年間六〇〇億円以上、時には八〇〇億円以上を超えるような維持費がかかっています。道民一人あたりに換算すると、赤ちゃんからお年寄りまで含めても一人一万円を超えます。また、二〇〇〇億円と言われる安全対策費も現在では三〇〇〇億円を超えることは間違いないと言われています。こんな莫大な維持管理費用について、私たちが支払った電気代の中から捻出してまでも、そして何よりも重大で壊滅的な事故が起きるかもしれないという可能性を否定できない中で、なぜ泊原子力発電所を動かさなければならぬのでしょうか。

確かに、一時は電力供給が心配されました。しかしながら、石狩湾新港には液化天然ガスの発電所が稼働しましたし、北海道ガスの電力供給システムも徐々に整いつつあります。北本連携と呼ばれる本州からの海底ケーブルも以前の六〇万キロワットから増強されています。どこの資料を見ても、危機的な電力供給の状況にあるとは受け取れません。それでも北電は「老朽化した火力発電所の問題が残る」と言っていますが、そういった論理はもう通用しないのではないのでしょうか。

再び原子力規制委員会の話になってしまふのですが、田中俊一前委員長は「原子力発電所事故は必ず起こりうる。起こらないための安全対策ではなくて、起こりうることを前提した安全対策」と

述べています。

私はこれ以上、放射能汚染による悲惨な現実を産み落とさないためにも、泊原子力発電所の再稼働は絶対に認めてはならないと思うのです。そのためにも行動するのか、そこから始めていかなければいけないのではないかと強く思っています。以上で、私の話を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

へかたの こういち

本稿は二〇二〇年二月一九日に開催した「第三回放射能汚染土壌利活用防止条例制定研究会」の報告をまとめたものです。

文責・編集部